

シンポジウム「新しい松江の中世史像」

2016 年 5 月 14 日 於松江市総合文化センター

出席者：井上寛司(中世史部会長、第 5 章編集責任)

原 慶三(第 2 章編集責任)

長谷川博史(第 4 章編集責任)

紙面参加：西田友広(第 1 章編集責任)

川岡 勉(第 3 章編集責任)

I. 本シンポのねらい

1. 通史編 2・中世が出版されたのを機に、その紹介を兼ねて、本書の特徴や新しさ、歴史的意義や重要性などを、できるだけ多面的に提示し、興味を持って読んでいただけるよう努めたい。
2. 中世出雲国や松江市域の持つ歴史的特徴、及び日本中世史そのものについての理解をより深めていただけるよう努めたい。

II. 『松江市史』通史編 2・中世の構成

概観

第 1 章 中世社会の成立

第 2 章 中世社会の構造

第 3 章 中世後期の出雲と地域権力

第 4 章 中世の経済と社会

第 5 章 中世の宗教と文化

III. 本書の全体的な特徴

1. 中世編だけで通史編 5 冊の内の 1 冊を構成している。…島根県内の自治体史では初めて。
2. 政治・経済・社会・宗教・思想・文化など、歴史を構成する各専門分野の研究者の共同作業に基づいて、編集・執筆されている。…各章を担当する 5 人の専門研究者が配置され、かつそれを補う形で 5 人が加わり、合計 10 人(この他にコラム 1 人)もの多数の中世史研究者の共同作業として自治体史が編纂されたのも、島根県では初めてのこと。
3. 編集・執筆に当たった 5 人ないし 10 人が、全国的な視野に立ってみても、それを越える人がいない最高のメンバーによって構成されている。…優れた自治体史編纂のための、基礎的な人的条件。①各時代・分野の専門研究者として、全国的な規模で活躍し、全国的にも高い評価を得ていること。②島根県・松江市出身ないしそこに居住するなど、地域の状況をよく理解していること。この 2 つの条件を兼ね備えた、優れた人材に恵まれたのはまことに稀有で幸運なこと。
4. 内容的にも、全国的・世界的な視野に立って、中世出雲国や松江市域の持つ歴史的・構造的な特徴やその歴史的経緯が的確に総括・論述されている。
5. 一般に最も理解が困難とされる日本中世社会の全体像が、中世出雲国や松江市域の歴史に即して具体的に、かつ比較的平易な形で論述されていて、この点でも極めて興味深い。

シンポジウム「新しい松江の中世史像」

第一章「中世社会の成立」

西田友広

■特徴と構成

○特徴

全国的視野に立った悉皆的な史料調査と、それに基づく考察

従来の年代推定や史料解釈を改めた部分がある 例) 出雲国造の御家人化の時期

全国的な政治・社会の構造・動向と出雲国内のそれとの関係の把握に努めた

幕府・武士のみではなく、朝廷や寺社勢力の役割の大きさや相互関係を認識して欲しい

○構成

第 1 節「中世の始まり」院政のはじまり／院政を支えた人々／院政期の国政／知行国制度と出雲国／荘園公領制／武士の登場

第 2 節「院政の展開」平正盛の源義親追討／杵築大社と出雲国衙／鳥羽院政から後白河院政へ／荘園の成立

第 3 節「武家政権の成立」平氏政権の成立／治承・寿永の内乱／鎌倉幕府の成立と出雲国

第 4 節「幕府と朝廷」承久の乱／幕府権力と出雲国／出雲守護佐々木氏／杵築大社造営と幕府／国衙と府中

第 5 節「鎌倉後期の社会変動」モンゴル襲来／社会の動揺／鎌倉幕府の滅亡

■中世の出雲国・松江の政治的特徴

○出雲国は収益性の高い「上国」(大・上・中・下国の分類の 2 位)として院の近臣が知行する院政の基盤であり、松江市域は古代以来の国府の所在地、また日本海水運、宍道湖・中海水運、出雲・隠岐水運の結節点

→旧来の朝廷にとっても、新興の武家政権にとっても重要な地域

○治承・寿永の内乱では木曾義仲が山陰道に影響力を及ぼし、また出雲国は院権力(頼朝と競合した後白河院、承久の乱で敗れた後鳥羽院)の基盤

→幕府にとっての「敵地」としての側面、旧来の在地領主の没落と東国御家人の進出

○モンゴル襲来では「準最前線」としての位置

→守護・東国御家人の下向、兵糧米・警固番役の賦課、異国降伏祈祷と杵築大社造営

→幕府の関与の拡大

○守護佐々木氏の大規模所領は松江市域外の富田荘・塩冶郷(佐々木氏は塩冶氏を名のる)

→塩冶郷地域の政治的重要性の拡大、国府地域(府中)の政治的重要性の相対的低下

→朝廷・幕府の二元構造に対応し、府中・塩冶郷の二元構造が成立

中世前期は、新たに武家政権が登場し、朝廷・幕府の二極構造が成立したことにより、出雲・松江の政治的中心が、古代以来の府中から、近世の松江城下へと移動する発端となった時期

シンポジウム「新しい松江の中世史像」

第二章「中世社会の構造」

原慶三

■特徴と構成

○特徴

・中世社会の構造を「荘園・公領制」という支配体制の成立とその仕組み、さらにはその変容というキーワードに基づき述べた。いずれも中世史では抽象的で理解が難しいとされた内容であるが、最新の研究成果に基づきまとめた。

・中世社会における「家」の成立とその影響について、支配者と被支配者階級について簡単にまとめた。女性の地位についても近年注目されている「後家」をキーワードに述べた。

・荘園公領制がこの松江地域で具体的にどう展開したかについて、史料に基づき述べた。文献史料が残っている場合と残っていない場合があるが、後者についても歴史地理的観点から述べた。

○構成

第1節「荘園公領制」

荘園公領制とは／大田文と国衙支配

第2節「国衙と公領」

郡・郷・保と郡司・郷司・保司／名体制と中世村落／国衙免田・別名・別符

第3節「荘園の仕組み」

寄進と立荘／荘園の領有体系／預所・下司・公文と荘園経営／名主／荘園と国衙

第4節「荘園公領制の変容」

武家領・本所一円体制／南北朝内乱と半済令／御料所

第5節「松江市域の荘園・公領」

郡ごとの概況／意宇郡／島根郡／秋鹿郡

第6節「荘園・公領支配の推移」

揖屋荘／佐陀社／加賀荘／末次保

第7節「空間としての荘園・公領」

長田西郷と東郷／持田荘／大野荘／法吉荘と末次保／意東荘／来海荘・宍道郷と宍道氏

第8節「身分と家」

中世の身分制／中世の被差別身分／家の成立／一族の成立／所領の譲与と配分／女性の地位

■松江市域における中世社会の構造上の特徴

・松江市域には、中世前期には出雲国庁、後期には守護所が置かれ、出雲国の支配において重要な役割を果たした。前期には広義の守護領・幕府領も数多く分布し、それが守護大名京極氏、さらには戦国大名の支配にも大きな影響を与えた。

・皇室領(特に多いが、院政と出雲国の関係が影響している)、摂関家領、八幡宮領などの荘園も出雲国内の中では相対的に遅い時期まで維持されている。

・慶長7年の検地帳が残る長田(川津)東郷と下意東について、その開発の進展について述べた。

・平安末期に出雲国に入部した大野氏と室町初期に入部した宍道氏の動向を明らかにした。

■特徴と構成

○特徴

- ・従来、中世後期の出雲は尼子氏を中心に論じられ、南北朝・室町期の京極氏や山名氏の出雲支配については尼子氏登場の前段階として触れられるにとどまる傾向が強かったのに対し、本章では室町幕府—守護体制の成立・展開・変質過程と結びつけて出雲の守護支配の変遷を明確にした。
- ・尼子氏を幕府や守護を軸とする室町期の秩序の破壊者と見なしてきた旧来の理解に対して、京極氏から尼子氏への支配権の継承、八か国守護職補任の意味、戦国期の戦乱状況から生み出される対立軸の変遷など、近年の研究の進展を踏まえて論述するように心がけた。
- ・正面から論じられることの少なかった戦国・織豊期の毛利氏の出雲支配についても、その性格や特徴、地域社会に与えた影響などを総合的に描き出した。

○構成

第1節「南北朝内乱と出雲国」

建武の新政／南北朝内乱の始まり／観応の擾乱と出雲／京極氏・山名氏の出雲支配

第2節「室町幕府—守護体制と出雲」

京極氏による出雲支配の確立／京極氏による分国経営

第3節「応仁の乱と出雲」

室町幕府—守護体制の変質／応仁の乱の勃発と出雲の戦乱／大乱後の権力秩序の再編

第4節「尼子氏の強大化と出雲」

京極氏から尼子氏への国成敗権の移動／尼子氏の軍事進攻と近隣諸国／尼子氏と大内氏の対立状況の緩和／尼子氏と大内氏の軍事衝突／尼子経久の人物像と諸政策

第5節「戦国の争乱の激化」

戦国期の諸勢力と尼子氏権力／尼子氏と大内氏の衰退／尼子氏と毛利氏の攻防

第6節「織豊政権と毛利氏領国」

戦国争乱の広域化／豊臣政権下の毛利氏領国／惣国検地と防長移封

■中世後期の出雲の政治的特徴

- 中世後期はそれまで以上に地域社会の自立性が高まり、各地に領主が割拠して競い合う状況が見られる一方、室町幕府の全国支配を背景に領主たちを統制する守護の権限が拡大し、京極氏や山名氏など守護を通じて出雲の政治的安定が図られた。
- 戦国期になると京極氏の守護代であった尼子氏の勢力が強大となり、出雲の支配秩序は尼子氏を中心とする形に再編成され、寺社と深い結びつきを有してきた地域社会のあり方が変動していく。
- 毛利氏の出雲支配は軍事的性格が非常に強く、出雲の人々は多大の負担を強いられた。
- 16世紀前半までは中海西南岸地域、16世紀後半には末次・白潟のある宍道湖東岸地域が戦場となることが多く、内海水運の発展に伴って中海・宍道湖地域の政治的・軍事的な比重も高まりを見せた。

第四章 中世の経済と社会 ～松江地域の歴史的特徴をめぐって～

長谷川博史

■特徴と構成

○特徴

- ・中世における水域を中心とした松江地域の景観復元を初めて試みたこと
- ・日本海水運・内水面交通の展開や中世港湾都市の形成を明らかにすることにより、松江地域の通時代的な全体的特徴を浮き彫りにしたこと
- ・生業や環境という観点を重視することにより、できるだけ人々の生活の実像に迫るとともに、それらが中世の政治・宗教・経済・社会を根底において支えていた事実を明らかにしたこと
- ・少なくとも東アジア規模の視点から、地域の歴史の大きな転換を描き出したこと
- ・以上を通して、松江城下町形成の基盤や前提を明らかにしたこと

○構成

第一節 中世の生活と環境

人々の暮らしの変容／気候・災害・戦乱・環境／中世松江地域の景観

第二節 中世水運の展開と港湾都市の形成

内海の諸港湾／中世西日本海水運の展開／港町の形成と展開

第三節 生業の展開と地域社会

多様な生業の展開／寺社造営と地域社会／石見産銀の輸出と地域経済の変動

第四節 城館遺跡からみた中世の松江地域

城館遺跡の概要／居館と山城／尼子氏の国内平定戦と山城／

雲芸攻防戦と山城／尼子家復興戦と山城／山城の終焉

第五節 考古資料からみた中世の松江地域

遺跡からみた出雲府中／中世の墓地／中世の石塔



■「中世の経済と社会」が物語る松江市域の歴史的特徴

山陰海岸において例外的に大きな潟湖を擁する島根半島は、ランドマークとしての大山・三瓶山や、西日本海を代表する規模の離島である隠岐島とともに、周辺海域を利用した物流拠点たりうるすぐれた地理的条件を有している。また、潟湖と河川がおりなす内水面交通は、少なくとも『出雲国風土記』が編さんされた 8 世紀には広範に展開していた。古代出雲国の中心地である意宇平野は、外海とも直接的につながる内水面交通の要衝でもあった。松江地域は、そのような場所に位置している。この地域の人々は、日常的に水と深く関わりながら生きてきたといえる。

中世に展開した西日本海水運は、年貢輸送経路を出発点とし、廻船ルートの形成によって、従来以上に広域的な人と物の流れが展開していった。美保関が山陰海岸を代表する港湾として抜きん出た重要性をもつに至るのは、そのためである。さらに、14～15 世紀には、朝鮮半島との通交関係に示されるように、西日本海西部(島根半島・隠岐島・玄界灘・朝鮮半島南東沿岸)には、広域のかつ日常的な交流が展開され、応仁文明の乱など戦乱の影響も受けて、西日本海水運はさらに多くの船舶がネットワーク状に行き交う海域となった。島根半島の大半を占める松江地域は、そのような海域全体の変容から大きな影響を受けたことが想定される。

後の松江城下町は、島根半島中央部に中世から存在した市町である末次・白潟を基盤に形成されたものである。いずれも内水面交通の拠点としての港町であるとともに陸路の要地でもあった。特に白潟は 16 世紀に入る以前から町としての姿を見せ始め、その規模は従来考えられていた以上に大きい。また、そこに暮らす住民たちは、時の権力者から相対的に自立的な動き方が可能な基盤を持っていたと考えられる。物流拠点であるために、しばしば戦乱に巻き込まれた苦難の歴史でもあるが、そのような基盤が松江城下町形成の重要な前提となったものと思われる。

港町が形成されて、物流が豊かに展開されたことは、この地域にさまざまな生業が存在したことを背景としているのみならず、生業の展開を一層促したものと考えられる。魚介類や農作物はもとより、鉄や塩や絹がさかんに取引された可能性が高い。また、番匠・鍛冶・鋳物師・杣・紺掻・漁師・磨師・塗師・鞆師・銀細工などさまざまな職人たちが、兼業・雑業など多様な業態の人々が、至る所に暮らしていた可能性が高い。そのようなあり方を総合的に表面化したものの一つが寺社造営事業であり、たとえば天正 11 年(1583)の神魂社造営をみれば、地域社会全体のもつ力量がそこに反映されていたことがわかる。

このような、広域的・日常的な物流に支えられた広範な生業の展開は、16 世紀後半になると、大陸へ向けた石見産銀輸出の増大を最大の契機として、さらに広域的で大規模なものへと拡大した。山陰海岸には、唐船(東シナ海以西の明の船舶)、北国船(北東日本海海域の船舶)、南九州の船舶などが、従来は日常的に寄港していなかった港湾にまで着岸した。16 世紀に港湾機能を拡大した諸港湾は、さらに重要性を高め、港町としての末次・白潟はその代表的存在となった。

16 世紀後半は、戦乱と混乱の時代であった(第三章参照)。淘汰された勢力も多いと考えられ、旧来の秩序は急激に変化していった。しかし、そのようななかで、地域社会の基盤を支え次の時代への展開を準備した勢力が存在したことは、紛れもない事実と思われる。

シンポジウム「新しい松江の中世史像」

第五章「中世の宗教と文化」(文学・美術分野を除く)

井上寛司

■特徴と構成

○特徴

・従来の島根県内自治体史では、一度として中世における宗教構造の全体やその歴史の変遷が論じられたことはない。それは全国についても同様で、本書は恐らく日本国内の自治体史では初めての試みと評価することができるであろう。

・従来の自治体史では、中世における神社の全体構造やその歴史の変遷、従ってまた寺院と神社との具体的な関係やその歴史の変遷についてもまったく論じれたことがなく、この点でも初めての試みと評価することができる。

・従来の自治体史では、中世寺院は専ら宗派史的な観点から論じられ、宗派(教団)の本格的な成立が中世末期の戦国期であること(日本固有の宗教とされる神道の成立もその重要な一環)が見落とされてきた。そうした点をも視野に入れた中世寺院の全体像とその歴史の変遷について論じたのも、本書の重要な特徴の1つといえる。

○構成

第1節「古代から中世への宗教構造の転換」

出雲国造の西遷とその歴史的背景／杵築大社の転換

第2節「中世的宗教構造の成立と特徴」

中世の杵築大社と出雲府中／中世宗教構造の基本骨格としての顕密体制／中世神社の諸類型と具体相／中世寺院の諸類型と具体相

第3節「中世的宗教構造の変容と解体」

仏教革新運動と禅律僧の活躍／鎌倉新仏教の成立と展開／中世諸国一宮制の変質と解体／吉田神道の成立と寺社造営のラッシュ／顕密体制の解体とその歴史的特徴

第4節「松江と中世文学・芸能」

文学／芸能

第5節「美術から見た中世の松江」

■松江市域における中世宗教の歴史的特徴

・中世の松江市域には、出雲国鎮守(一宮)杵築大社の前進基地とされる神魂神社、及び出雲国惣社と戦国期に出雲国二宮と称された佐陀神社、さらに一国一寺の安国寺や焼失した国分寺に代わって国府域における寺院としての機能を担った平浜八幡宮などが集中的に存在していて、文字通り中世出雲国における宗教センターとして機能した。

・これは意宇平野部が中世出雲府中と呼ばれたことと表裏一体の関係にあり、杵築大社(国造)が神魂社を媒介としながら、本来は出雲国衙が担っていた出雲国全体の宗教的機能を独占的に掌握し、公家・武家と並ぶ形で国家権力(地域支配権力)の一翼を担ったことによるもの。

・中世府中域にある神魂神社を中心とする6つの神社を、近世以後「意宇六社」と称するようになるのも、そうした中世松江地域の抱える特異な宗教構造の象徴・名残といえることができる。